

URL <http://www.okayama.med.or.jp/ishi/bukai/bukai.html>

目次

| | |
|--|---|
| 女性医師支援シンポジウム2014..... | 1 |
| 第4回岡山県医師会勤務医部会・女医部会合同総会..... | 5 |
| 第10回男女共同参画フォーラム..... | 7 |
| シリーズ女性医師支援 病院での取り組み「高梁市国民健康保険 成羽病院」..... | 9 |

岡山県医師会

〒703-8522
岡山市中区古京町 1-1-10
TEL 086-272-3225
FAX 086-271-1572
E-mail:
oma@po.okayama.med.or.jp
URL:
okayama.med.or.jp/ishi/
bukai/bukai.html

女性医師支援シンポジウム 2014 「女性医師のリアルなライフスタイル ～女前なロールモデルを探そう！～」

標記シンポジウムが、平成26年5月24日（土）午後1時から東京女子医科大学 弥生記念講堂で開催された。

竹宮 孝子先生（本学総合研究所准教授、女性医師・研究者支援センター副センター長）の司会で始まり、続いて東京女子医科大学学長、男女共同参画推進局局長である笠貫 宏先生のあいさつ、その後「女性医師・研究者支援センター」について女性医

師・研究者支援センター長 斎藤 加代子先生より方針等の説明、実際に支援を受けている女性医師による「女性医師・研究者支援センター」との関わりや研究成果が報告された後、公開討論「女性医師のリアルなライフスタイル～女前なロールモデルを探そう！～」が行われた。今回のシンポジウムは164名が参加し、本部会からは佐藤友美委員が出席した。以下は講師の抄録を記載する。

プログラム

| | |
|---------------------|---|
| 13:00-13:25 開会式 | 総合司会 ・竹宮 孝子 先生 （東京女子医科大学総合研究所准教授、女性医師・研究者支援センター副センター長） 挨拶 ・笠貫 宏 先生（東京女子医科大学学長、男女共同参画推進局局長） ・斎藤 加代子 先生 （東京女子医科大学遺伝子医療センター所長・教授、女性医師・研究者支援センター長） |
| 13:25-14:25 研究発表 | 平成25年度「宮原敏基金・女性臨床医師支援」対象者による研究報告 ・演者：近本 裕子 先生（東京女子医科大学腎臓小児科 准講師） 平成25年度「女性医学研究者支援」対象者による研究報告 ・演者：松下 典子 先生（東京女子医科大学消化器内科 助教） |
| 15:00-16:45 公開討論 | 【シンポジウム講演者】 ・石井 史 先生（いしい内科クリニック 院長） ・小倉 薫 先生（東医療センター乳腺外科 助教） ・白戸 泉 先生、白戸 美穂 氏（八千代医療センター消化器内科 医員） ・東 理人 先生（東京女子医科大学心臓血管外科医療練士 研修生） ・藤澤 美和子 さん（東京女子医科大学医学部 4年生） ・野原 理子 先生 （東京女子医科大学衛生学（一） 講師、女性医師・研究者支援センター副センター長） |
| 16:45-16:50 閉会式 | ・高桑 雄一 先生（東京女子医科大学医学部長、生化学教室主任教授、総合研究所所長） |
| 17:00-18:00 | 交流会 |



■ 開会挨拶

笠貫 宏先生

(東京女子医科大学学長、男女共同参画推進局 局長)

これまでに(医学部)1年から4年までの講義で人間性と女性医師として社会における指導者を目指す話をしています。そういう中で「女性医師支援シンポジウム」は大変魅力的なテーマだと思います。「女性医師のリアルなライフスタイル ～女前なロールモデルを探そう!～」私はこちらにある女前とは何だろうかと考えました。女前とは何か、女性としてのライフスタイルの中で結婚、育児を乗り越える行動の美しさの表現であるのではないかと思います。

「女性医師のリアルなライフスタイル ～女前なロールモデルを探そう!～」今日の会が素晴らしい会になるように、素晴らしい成果があげられ、また次の教育に繋がれることを期待しています。

■ 「東京女子医科大学 男女共同参画推進局 女性医師・研究者支援センター」について

斎藤 加代子先生

(東京女子医科大学 男女共同参画推進局 女性医師・研究者支援センター長・東京女子医科大学 遺伝子医療センター所長・教授)

学外に目を向けると、医師国家試験合格者に占める女性の割合が40%になろうとしている現在でも、大学において診療や研究を継続し、リーダーシップをとって活躍する女性医師は極端に少ない現状があります。医学部医学科における女性研究者、女性教員のロールモデルの不在が(女性)医師不足の原因のひとつとして考えられます。医学部医学科における女性教員を増やすこと、女性医師・研究者が勤務を継続できる環境整備をすること、多様で優れた女性医師・研究者の活躍を促進することは、わが国に

おける医師不足の対策としても課題といえます。本学の女性医師・研究者支援はその意味で、女性医師問題、女性研究者問題の解決のためのモデルとして非常に重要な立場にあることを自覚しております。

東京女子医科大学では、指導的立場となる優れた女性医師・研究者の育成を行い、育児支援と女性医学研究者支援のモデルを育成する目的で、平成18年度から文部科学省科学技術振興調整費を受けて「保育とワークシェアによる女性医学研究者支援」を実施しました。この事業の3年間の成果を生かし、女性医師・研究者の支援の充実をめざして、「男女共同参画推進局(局長:学長)」の下に「女性医師・研究者支援センター」が発足して、6年目となりました。女性医師・研究者支援センターのミッションは、女性医師・研究者のキャリア形成の継続の支援、ロールモデルの育成、そして価値ある業績を蓄積できるように環境整備することにあります。勤務体制の支援として短時間勤務、子育て支援、e-ラーニングによる女性医師支援があります。院内保育所においては、昼間保育、延長保育、夜間保育、休日保育、そして病児保育を充実させてきました。待機児保育として院内保育所を産休・育休明けに利用して、早期の職場復帰がなされています。さらに、地域でつながる会員制の子育て支援として、女子医大ファミリーサポートがあります。女子医大ファミリーサポートは、保育園や学校の送迎、放課後の見守り、休日の保護者の外出時の保育など理由を問わず、個別対応もしています。この取り組みが、男女共同参画を推進し、医師不足を解消し、医療の発展と医学の進歩がもたらされると考えます。

本日の女性医師支援シンポジウムは、前半で本学の研究支援・保育支援を活用しながら研究を進めてきた女性医師の研究成果の発表、後半は特別講師の皆様に参加いただいて公開討論会を企画しております。昨年、本シンポジウムは医学部4年生の人間関係教育の授業の一環となりました。女性医師としてキャリアを積み重ねつつあるロールモデルに接し、様々な体験や意見をお聞きする貴重な機会です。学内外の多くの皆様の参加と積極的な討議を期待しております。

■ 研究成果報告

1. 平成25年度「宮原敏基金・女性臨床医師支援」対象者による研究報告

研究課題：「小児腎移植の成績向上に関する研究」

演者：近本 裕子氏

(東京女子医科大学 腎臓小児科 准講師)

小児腎移植の現状と現在の問題点を明らかにし、長期的予後の成績向上に繋げることを目指し検討した結果、患者生存率、移植腎生着率ともに海外報告と比較し良好であった。しかし、20歳未満における移植腎喪失例の生命予後および腎移植後の生活には課題が多かった。

2. 平成25年度「女性医学研究者支援」対象者による研究報告

研究課題：「Ornithine carbamoyltransferase (OCT) における肝硬変診断バイオマーカーとして検討」

演者：松下 典子氏

(東京女子医科大学 消化器内科 助教)

これまでOCTはミトコンドリア由来の肝に特異的な逸脱酵素としてアルコール性肝障害の診断において有用とされてきた。本研究では、NASHを含む慢性肝疾患におけるOCT値と疾患別肝重症度、肝硬変との関係、バイオマーカーとしての検討を行った結果、その有用性が示唆された。

■ 公開討論会

「女性医師のリアルなライフスタイル～女前なロールモデルを探そう！～」



【シンポジウム講演者】

- ・石井 史先生 (女性、いしい内科クリニック 院長)
- ・小倉 薫先生
(女性、東医療センター乳腺外科 助教)
- ・白戸 泉先生、白戸 美穂先生
(ご夫婦、八千代医療センター消化器内科 医員)
- ・東 理人先生
(男性、東京女子医科大学心臓血管外科 医療練士研修生)
- ・藤澤 美和子さん
(女性、東京女子医科大学医学部 4年生)
- ・野原 理子先生
(女性、東京女子医科大学衛生学(一) 講師、女性医師・研究者支援センター副センター長)

【司会】

- ・竹宮 孝子先生
(東京女子医科大学総合研究所准教授、女性医師・研究者支援センター副センター長)

司会 今年度の女性医師支援シンポジウムは、「女性医師のリアルなライフスタイル～女前なロールモデルを探そう！～」と題して、公開討論を行います。各パネリストは、仕事とライフイベントをどのようにマネジメントしてきたのか、本音で話し合います。皆様にも是非討論にもご参加いただき、「女前」の意味についても一緒に考えていただければと思います。

実は、事前にパネリストの皆さんと打ち合わせを行った際に、お子さんの人数が3人という共通点に気付いたのですが、お話を伺う中で忙しい日常をうまくコントロールし充実した仕事をしながら、お子さんもたくさん育てられていることがわかりました。また、今年は初めて、4年生の医学生も討論に参加します。彼女は働く女性の子供達の間を世話をする経験(学童保育士指導員)を通して得られた、「子供の自立性・社会性を高める保育環境」という大切なメッセージを持って討論会に臨みます。

今回のシンポジウムには、少子化、医師不足、この2つの問題を解決してくれるヒントがあふれ

ているような気がします。これから医師になる学生の皆さん、若手医師の皆さん、学生や若手医師を支えるベテラン医師の皆さま、そして日本を支える日本の将来を考える立場の皆さま、どうかお気軽に本討論会にご参加ください。

以下は、討論内容を踏まえ記載する。

Q 結婚の時期、妊娠の時期は

A 卒後すぐか、専門医を取ってから結婚するかの、結婚の時期は大きく2パターンようです。

卒後4年目で結婚された石井先生は9年間で3人のお子さんを生み、専門医を取って結婚された小倉先生は4年間で3人、3人目は現在お腹の中です。結婚や妊娠に、この時期が良いというものではなく、(子供が)出来た時期が良い時期です。人生の計画を立てるのは良いけれど、人生はタイミングであって、柔軟性が大切です。

Q 妊娠中はどのように働くか

A 上司の理解があり、時短勤務などを利用しキャリアを続けることができました。体調によって上司や医局、周囲のフォローがあり、無理せず働くには職場と家庭の協力が必要です。

Q 育休中にすることは

A 学位を取る。論文を作成する。データをまとめる。専門医のテスト勉強をしていたなど時間をやり繰りし、有効的に使うことが良いと思います。

Q 保育園の情報はどこから得るか

A 職場や(学生時代の)クラブの先輩、同僚などから情報を得る。またママ友の会での情報交換や女性医師・研究者支援センターからも情報を発信しているので、それらの情報を確認して自分に合った情報を利用してください。

Q 学童保育について

A 学童保育がない地域では、時短勤務、親や近隣のサポートを利用し、女子医大ファミリーサポートもあります。また近頃の学童保育の環境も変化

し、選択肢が増えていきます。学童に子供を預けると、塾や習い事の送迎、夕食の提供、夜21時まで利用できるなど、保育内容も色々であり、個々の生活環境に合わせて選択ができます。

Q 子供との接し方のポイント

A お風呂に子供と一緒に入る。子供と一緒に朝食をとる。登校の時間に合わせて出勤する。家事に少しずつ子供を参加させる。(子供との接するポイントは一緒にいる)時間の長さではなく、タイミングと思います。

Q 最後に先生方からメッセージを

石井 大切なことは、医師になったからには社会に貢献する責務があるということを常に自覚して、出産育児で仕事を休む時期があっても、医師として仕事を通じて社会に貢献する強い意志を持ち続けることではないかと思います。

小倉 子育てと仕事の両立は始まったばかりで、今後も色々な壁があると思いますが、女子医大には多くの先人がいるので誰かが声をかけてくれます。また後輩の身近なロールモデルとなれるように頑張ります。

白戸 泉(男性) 子供のいる生活、毎日が楽しくて仕方ありません。男性も子育てにかかわらなければもったいない。人生において、子育ての時期はそんなに長い時間ではないです。みなさん、一緒に楽しみましょう!

白戸美穂 子育て真ただ中ですが、充実していません。仕事と家庭の両立は、自分一人ですべてを背負い込むと息切れをしてしまいます。周囲のサポートを最大限に利用すれば何とかできることが多いと思います。

東(男性) 子供が生まれてから、時間をどう上手く使うか考えるようになりました。私自身としては少しでも育児に参加し、子供を育てる環境を整えたいと思っています。

藤澤 仕事を生涯続けながら、たくさん子供がいる家庭を築き、悔いのない人生を送ることができるよう、学生のうちから人生設計をしていきたいと

思います。

野原 自分のやりたいことがあって頑張っていると、周りの人は自然とわかってくれる。わかってくれる人、手を差しのべてくれる人がいる。その人の言葉をよく聞き、自分のものにしてください。(学生の)皆さん、これから自分がどうしていきたくかを考えて、医師になってください。

司会 子育ては一人でするものではありません。家族や地域の皆さんのサポートを受けて、そこで多くを経験し、充実したものにして欲しいです。子育ての時期はそんなに長くないので、皆さん一緒に子育てを経験しましょう。育てる子供と一緒に親も成長すると思います。

■ 閉会式

高桑 雄一先生

(東京女子医科大学 医学部長、生化学教室主任教授、総合研究所所長)

皆様、お忙しい中御参加いただき、ありがとうございました。

学生の皆さんは今日のシンポジウムで、今、感じたことを次に貢献してください。次は皆さんがロールモデルになってください。

■ 交流会

17時～

(文責 岡山県医師会女医部会委員 佐藤友美)

第4回岡山県医師会勤務医部会・女医部会合同総会

次 第

1. 開会
2. 挨拶
3. 勤務医部会総会
4. 女医部会総会
5. 特別講演
「とりだい病院のワークライフバランスへの取り組み」
鳥取大学医学部附属病院
ワークライフバランス支援
センター 副センター長
准教授
谷口 美也子 先生
ーコーヒーブレイクー
「大阪府医師会における勤務
医部会活動」
日本医師会勤務医委員会委員/
同男女共同参画委員会委員/
大阪府医師会勤務医部会参与/
大阪市立大学大学院医学研究科
病理病態学教授
上田 真喜子 先生
6. 閉会挨拶

平成26年7月5日(土) 14:00～17:00 岡山衛生会館5階中ホールにて岡山県医師会勤務医部会・女医部会合同総会が開催されました。

女医部会総会としては8回目、勤務医部会との合同総会としては4回目の開催です。

参加者は、女医部会他20名、勤務医部会15名と県医師会から6名でした。

今回、女医部会の参加者には郡市医師会から新しく委員になった方や、委員以外の女性会員(特に、女医部会担当の神崎理事が中心となって開かれた倉敷医師会の女性医師会員との懇談会に参加された女性医師会員)や岡山大学の女性医師の参加など、新しい方の参加が増えていました。

それぞれの部会報告の後、鳥取大学医学部ワークライフバランス支援センター 副センター長 准教授の谷口美也子先生より「とりだい病院のワークライフバランスへの取り組み」と大阪府医師会勤務医部会参与で日本医師会代議員の大阪市立大学大学院医学研究科病理病態学教授の上田真喜子先生より「大阪府における勤務医部会活動」と題して2つの特別講演がありました。

今回、初めての試みとして、2つの講演の間にコーヒーブレイクを設け、飲み物とお菓子を楽しみながら参加者みなさん思い思いのグループに分かれて、和やかな雰囲気の中交流を深めました。

(文責 岡山県医師会女医部会副会長 清水順子)

「とりだい病院のワークライフバランスへの取り組み」

鳥取大学医学部ワークライフバランス支援センター 副センター長 准教授 谷口 美也子 先生

平成26年7月5日、岡山県医師会勤務医部会・女医部会合同総会において、鳥取大学医学部ワークライフバランス支援センター・副センター長・准教授の谷口美也子先生による「とりだい病院のワークライフバランスへの取り組み」の特別公演が行われました。

その要旨をご報告いたします。

鳥取大学医学部附属病院は、鳥取県米子市にあり、約1,600名の職員が働いており中期目標で、「経営トップクラス」「働きやすさトップクラス」「人づくりトップクラス」を掲げています。また、ワークライフバランス支援センターが「働きやすさ」を支援する組織として平成22年に開設され、病院トップの方針と理解もあり、県や市、地域とも連携をとり、各取り組みを進めているそうです。

センターの活動は、

- ①啓発活動——男女共同参画講演会や各種講演・研修会、職員のための健康講座など。
- ②子育て・介護両立サポート——民間の育児サポート利用に対する補助事業や、24時間・365日体制の院内保育所や、病児保育など。
- ③メンタルヘルスサポート——心理相談員による相談窓口も開設して幅広い相談に対応すると共に、メンタルヘルス不調予防に対する取り組み。
- ④働きやすさ支援——夕食持ち帰りサービス、院内の「働きやすさ」に関する情報冊子の発行、

スタッフラウンジや当直室の整備などハード面の充実など。

- ⑤キャリア支援——仕事帰りに院内で受講できる語学教室（英語・ハンゲル）など。
- ⑥モニタリング——満足度調査やニーズ調査、アンケートなどで現場の声を聴くこと。

の6つの柱があり、また、医師の離職防止のための支援事業を鳥取県と共同で実施し院内外との定期的情報交換行っているとのことでした。

以上の活動から、本年2月、日本生産性本部の「ワーキングウーマンパワーアップ会議」のエンパワメント大賞で、全職種へのメンター配置、育児・介護の相談に特化した「面談パートナー制度」の新設、ひとり親家庭の積極的支援が評価され、病院で初めて奨励賞を受賞されたそうです。（ちなみに大賞はセブン&アイホールディングス、P&Gの女性の多い企業でした。）

多様な職種、勤務形態、勤務時間で働く病院だから“こそ”、職員ひとりひとりの職務満足度アップに繋がり、職員と病院が共に発展するような支援に取り組むことが目標であり、現状を考えると各病院だけでは限界もありますが、男女共同参画や2020.30（2020年までに30%の女性登用）を推進している国・県・市・医師会を含め広く連携していくことが大切だと感じました。

（文責 岡山県医師会女医部会副部長 渡邊恭子）

大阪府医師会における勤務医部会活動

日本医師会勤務医委員会委員／同男女共同参画委員会委員／
大阪府医師会勤務医部会参与／大阪市立大学大学院医学研究科病理病態学教授 上田 真喜子 先生

第4回岡山県医師会勤務医部会・女医部会合同総会は内容が盛りだくさんで、特別講演が2題ありました。

2題目の演者は、上田真喜子先生です。大阪府医師会勤務医部会参与、日本医師会代議員、大阪市立大学大学院医学研究科病理病態学教授をされています。

大阪府医師会勤務医部会は、昨年設立40周年を迎えられました。大阪府医師会の勤務医会員数は、約1万人で、大阪府医師会会員数全体（約1万7千人）の6割を占め、また各種部会・常設委員会の委員856人のうち、勤務医数は296人と34.7%を占めています。

多くの勤務医の先生方が、積極的に医師会活動に参加されています。大都市で大学病院や大病院が多く、勤務医数も岡山県とは格段の差がありますが、委員会の開催時間を考えたり、勤務医にとって有意義だと実感できるテーマを選び、勤務医の参加を増やす努力をされているそうです。ちなみに、岡山県医師会の会員数は、今のところ、3136名で、勤務医会員は1862名、59.3%とのことでした。また、今年度は未集計ですが、昨年度の各種部会の委員数は350名で、勤務医は168名と48%を占めていました。

大阪府医師会では、平成22年から女性医師支援プ

ロジェクトを勤務医部会と連携して進めて、成果を上げておられます。平成24年の70の基幹型臨床研修病院のアンケートで、この2年間で、院内保育は、69%から86%、病児保育室は、23%から40%、短時間勤務は、44%から81%と整備が進んでいます。また、女性医師支援が進めば進むほど、産休・育休中の代替医師を確保するための運用システムが必要になります。まずは、定員が少なく女性医師が多い診療科である、産婦人科、耳鼻咽喉科、麻酔科、小児科、眼科、皮膚科、及び内科の中でも特に緊急性・専門性の高い循環器内科などから、具体化を検討することです。このための産婦人科のワーキンググループでは、大阪府内の5大学、産婦人科医会、勤務医部会、女性医師支援ワーキンググループが参加され、協力されています。退職された先生方の登録だけでなく、大学病院や他の病院の支援があれば本当に助かります。医師不足と言われて久しいのですが、どこの県でも産休・育休のみならず、病気や介護のための代替医師の確保は困難です。他県の良い案を、いろいろ参考にしていきたいと思いました。

今後ますます、開業医と勤務医の連携が医師会活動に重要です。勤務医、特に若い先生方にどんどん参加していただければと思いました。

（文責 岡山県医師会女医部会部会長 深田好美）

第10回男女共同参画フォーラムに参加して

岡山県医師会女医部会委員 松香陽子

平成26年7月26日（土）、日本医師会館において開催された第10回男女共同参画フォーラムに参加させて頂きました。

実は、長年所属している日本医師会のある日本医師会館を一度は見たい、というのが動機でした。朝一番の電車に乗り遅れないかと前夜は眠れず、

新幹線では首が痛くなるほど塾睡し、猛暑の中を駅から10分も歩くのは御免と一駅前で電車を降りてタクシーに乗り換え、何とか日本医師会館に到着しました。

大講堂には既に多くの方が集まっておられ、岡山県から選任の笠井英夫日医常任理事の開会宣言の後、横倉義武日医会長の挨拶が始まったところでした。

参加者名簿によると、都道府県から189名、日医から28名と200余名が集まる中、岡山県からは、神奈川県12名、福岡県10名に次ぐ、茨城県、東京都、熊本県と同数の9名の参加でした。

横倉会長の基調講演「日本医師会の男女共同参画の10年の歩み」に続き、日本医師会男女共同参画委員会から前副委員長の長柄光子氏、日本医師会女性医師支援センターから前委員長の秋葉則子氏が活動の報告をされ、座談会「医療界における男女共同参画の推進にむけて」が始まりました。東京大学名誉教授・政策研究大学院大学教授の黒川清先生、自治医科大学長の永井良三氏、前男女共同参画委員会委員の津田喬子氏のプレゼンテーションがありました。黒川先生にはアメリカから帰国されたその日に、児島での講演会の講師としておいで頂いたことがあり、その精力的な活動に驚いた記憶がありましたが、さらに世界を股にかけ、学問のみでなく男女共同参画についても深くお考えになっていることに感動しました。

小講堂で、歴代の日本医師会長のお写真に囲まれて昼食休憩。初代日医会長は北里柴三郎先生だったのですね。

午後の部はシンポジウム。女性が輝く社会に向けて（佐村知子氏）、大学医学部における10年の歩みと今後に向けた課題（板東久美子氏）、臨床研修医におけるキャリアパスと出産・育児等のライフイベントとの両立について～臨床研修医制度の見直しを踏まえて（國光文乃氏）、男女共同参画の視点から見た専門医制度改革（小森 貴氏）、10年で医療界における男女共同参画は進んだのか～病院管理部門における女性医師数の変遷から見えるもの～

（小笠原真澄氏）の5講演後、総合討論が行われました。

フォーラム宣言採択後、次期開催地である徳島県医師会長の川島周先生の挨拶があり、会を終了しました。

内容豊富な会でしたが、男性側の意識改革と子育て支援の環境整備が出来ない限り、医療界に限らず、2020.30の実現は困難であるという印象を持ちました。勿論、働く女性も甘えず、責任を果たす覚悟を持つことが大切ですが。

その後の小講堂での懇親会では、岡山県医師会勤務医部会・女医部会合同総会でご講演を頂いた広島県医師会の檜山桂子先生や大阪府医師会上田真喜子先生にも再会し、楽しいひと時を過ごし、横倉会長、笠井常任理事を囲んでの記念撮影後、会場を後にしました。

帰り道、柳沢吉保が造らせた六義園の横を通りましたが、閉園時間を過ぎており残念！（開園しているてもあの暑さでは歩けません）。ところが隅田川の花火大会があるとの情報をキャッチし、深田部会長、坂口副部会長と参加を決意し、猛暑と人混みの中、満員電車に乗り込み両国へ移動しました。歩行者天国となった道路の中央分離帯に腰を下ろし、スマホを楽しむギャルの隣で、ビルの谷間に上がる花火をしばし観賞しました。生で見ることは一生無いと思っていた隅田川の花火というおまけまで頂いた有意義な一日でした。



「女性医師支援 病院の取り組み」



高梁市国民健康保険成羽病院

院長 紙谷 晋吾 先生

高梁市は岡山県の中西部にあり西は広島県と接している中山間地域です。市内には日本3大山城のひとつである備中松山城や、吹屋のふるさと村など見所があり、また幕末のアベノミクスとして有名な山田方谷の生誕の地でもあります。人口は3.4万人ですが年々減少傾向で、高齢化率は35%を超える全国でも有数の人口減の先進地域です。

国民健康保険成羽病院はその高梁市の西部地域にある公立病院で、昭和29年に開院し、今年で60年になります。現在は一般病床54床、医療型療養病床42床のへき地医療拠点病院、救急告示病院として地域医療に取り組んでいます。

地方の中小病院の例にもれず、医師不足は深刻で、常に医師不足の解消に心を悩ませていますなかなか有効な医師確保の手段は見いだせない状況です。

へき地医療拠点病院として当院は県より自治医科大学の地域勤務医の派遣をいただいています。そのため常勤医は現在6名で（自治医大出身者3名）内1名が自治医科大学出身で地域勤務義務年限内の女性医師で、県から派遣され勤務しています。その女性医師は私が平成25年に院長に就任するのと時を同じくして就職され、先般の岡山県医師会報1383号（6月10日）の女性医師コーナーEnjoi通信に寄稿された松田祐依先生です。卒後4年目の澁刺とした、積極性あふれる医師で、成羽病院内科、吹屋診療所の診療所長として、へき地医療、在宅医療、総合診療、救急診療から内視鏡と休む間もなく飛び回っています。ただつい無理をするためオーバーワークにならないように気を配る必要があります。

女性医師の比率は年々増加しており、平成26年医師国家試験の合格者では34%が女性となっており、当院へ派遣いただく自治医科大学の卒業生も現在義

務年限内の医師13名のうち4名が女性医師です。以前には50%を超えた年もあったようです。

また平成27年より卒業する岡山大学地域枠の学生も現在38名中15名が女性であり、これからは女性医師が働きやすい環境を整えていくことが医師不足の解消にもつながると考え、私どものような中小病院の喫緊の課題と捉えています。

振り返ってみて当院は高梁市立の公営企業法一部適用病院であり就労支援制度は市の制度の範囲内で運用しており、病院独自として女性医師支援制度は特に整備していませんでした。つまり56日の産前・産後休暇（給与は満額支給）、子供が3歳に達するまでの育児休業（子が1歳までは共済組合より育児休業手当金が支給される）、生理休暇、子育て支援として時間短縮勤務制、育児休暇・介護休暇などは用意されていますが、当直など所定外勤務免除、院内保育園、院外提携保育園、病児保育、ベビーシッター費用補助などはこれまでの所前例がなくまだ実現できていません。

しかし女性医師の就労支援を考える時、ワークライフバランスを常に考慮しての細やかな配慮が必要です。



当院では看護師を含めたスタッフの就職支援の意味から本年度遅ればせながら市と協議し院内保育・病児保育の開始に向けた取り組みを開始し、早急に開設することにしました。また当直や時間外など所定外勤務免除は自然に必然性が出てくることですが、今後就労規則などに明記していきたいと思えます。さらに来年度は医師住宅の立て替えを行い、住環境への配慮もする予定です。

就労環境の整備だけでなく、職務・診療の内容についても十分に意見を聞き、一人一人の不安・解決すべき問題点を捉え、相談や要望に答える努力をしていくこと、さらにキャリアアップのためには幸い片岡仁美教授がセンター長をされている岡山大学医療人キャリアセンターMUSCATがあり、その研修、セミナーへの参加を担保して、女性医師のライフステージに応じた支援を進めていくことが大切と考え

ています。

そしてへき地医療拠点病院として岡山県女性医師等就労環境改善事業の活用も可能なため、支援策を整備しつつ女性医師の招聘を是非行っていきたいと考えています。

ここまで私どもが必要に迫られないままに不十分なままにしていた点を改善し、女性医師のみならず女性職員の就労支援を進めることが、国が推進する女性が輝くための方策として大切だと思います。

そして臨床研修制度や専門医制度などの影響ともいえる医師不足・医師の偏在が問題となり久しいのですが、女性医師への支援策を「女性医師が働きやすい職場はすべての医師が働きやすい環境である」という男女共同参画理念のもとに整えて行くことが、ひいては地方での医師不足解消の一助にもなるとの認識を持ち、努力していきたいと思えます。

